
私の歌姫

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の歌姫

【Nコード】

N2036Z

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

伍アキオは海外出張中、美しい華僑の女性アイリーンに出会う。彼女と会いたければかりに嘘をつくアキオだが……。 (本文の英文、中文は作者が勉強中のため不自然かもしれませんが、暖かい目を見守ってください)

怪しい会社（前書き）

アロハシリーズの一つです。単独でも読める話です。

怪しい会社

胡散臭いな。

私は薄汚れた茶色の建物を見上げる。

近代的な建物が建つ中、そこだけが古ぼけて見えた。窓はなぜか黒くて、中が見えなかった。

本当にここか？

私は手元の紙を見つめる。

間違っていない…

私はため息をつくと建物の中に入った。

この国に出張することがわかり、何気なくパトリックに話したら、支社の社長に渡してほしいものがあると、紙袋を渡された。

面倒だと思って断ろうと思ったら、その彼女のミヒロちゃんに頭を下げられた。

妹のような可愛い笑顔に思わずわかったと頷いてしまった。

彼らと会ったのは丁度半年前だ。

初めは怖がっていたミヒロちゃんも最近は私になついてくれたらしく、よく連絡をくれる。

しかし、パトリックはそれが嫌いというか、嫉妬するらしく、ミヒロちゃんから電話がくると奴からも連絡が必ず入る。

面白い男だ、からかうのが面白くてわざとミヒロちゃんに連絡をとったりしている。

奴はクールを装った面白い男だ。
アニメ好きという点を覗けば気が合う。

どうやら渡された紙袋には私が苦手なものが入っているようだった。支社の社長もおかしな奴だと聞いている。
どんな面白い奴が楽しみだな。

私がそんなことを考えているとチンと音がして、エレベーターが止まる。

確か右手の一番端の530号室って言ってたな。

私は妙な音がするエレベーターから降りると、表札を確認しながら廊下を歩く。
静まり返った建物だった。
白いドアだけが廊下に見える。

本当おかしな場所だ。
パトリックとミヒロちゃんはこんなことに勤めていたのか。
信じられんな。

『Tan Tan Travel Agency』の表札が見え、
私は一息つくとノックをする。
ドアベルとかインターフォンがないことが驚きだった。

「はい？」

そう声がして褐色の髪日本人女性が顔を出す。

いつもの癖で私はじつと顔を見てしまう。
女性は私の視線にむっとした表情を見せる。

怒った顔がなんだかそそる感じだな。

私はそんなことを思いながらも営業スマイルと浮かべた。

「すみません。私はパトリックの友人の伍アキオです。館林社長を訪ねてきたのですが……」

「パトリック？ああ、聞いている、聞いている。鈴木、怪しい奴じゃないさそうだ。中に入ってもらえ」

中からそう声が聞こえ、鈴木と呼ばれた女性はじろつと私を見た後、ドアを全開にする。

「どうぞ」

中に入ると一番端の机に小麦色の肌の30歳過ぎの男が見えた。もてそうな顔で少し自信過剰にも見える笑顔を私に向けていた。

「伍さん、悪かったですね。こんなところまで来てもらって」

男、多分館林と思われる男は笑顔を浮かべたまま、私に近づいてきた。

「いえいえ。パトリックはいい友人なので。長三山さんもよろしくと言ってましたよ」

「ああ。長三山？あの子も元気にしてるんですね？」

「ええ」

私は館林にっこりと笑顔を向けながらうなずいた。

歌姫

「なるほど。証券会社」

応接室に通され、私と館林は名刺を交換する。

「ああ、本社と同じビルに入居しているんですね」

「ええ」

私は館林の問いにうなづく。

「伍というのは珍しい名字ですね」

「ええ。私の両親は中国から来たんですよ。でも私は日本生まれ、日本育ちなので完全に日本人なんですけどね」

「なるほど。それじゃあ、中国語はもちろんできますよね」

「ええ。でも会話くらいですけど」

「それでも十分ですよ。私も中国語は勉強したいと思っているんですけど、なかなか」

「いやあ。私の場合、英語がからつきしだめで、出張の時は結構困ることが多いんですよ」

「そうですか？」

「ええ、世界に華僑は散らばってますが、共通言語はやはり英語ですからね」

私と館林はそんなそつのない会話を交わす。

館林は人のよそうな男に見えた。しかし、笑顔の奥の瞳はじつと私を見つめていて、本心が掴めない男だった。

「はい、お茶です。どうぞ」

ドアをノックする音がして鈴木さんが香りのいいお茶を持ってくる。テーブルの上に湯飲みを置くときに、ふわりと爽やかな香りが出て、私は彼女の顔を近くで見つめずにいられなかった。

よく見ると私好みの顔の中世的な顔だった。このガードが堅い感じがそそるよな。

「伍さん」

そんなことを思っていると、ひやりとするような声が呼ばれ、私は考えを中断させられる。

目を向けると先ほどまでの笑顔を消した、鋭い視線を向ける館林がそこにいた。

「申し訳ないが、この鈴木はすでに婚約者がいるんだ。遊ぶなら他の子を選んでくれませんか？」

「ははは。面白いことを言いますね。私は何も言ってますよ」

「先手必勝です。あなたは油断できなさそうな人なので」

「ははは。館林さん」

私が愛想笑いとすると、館林がにこりと笑う。

俺の女に触れるな

そう館林を言っているのがわかる。

鈴木さんは館林が先約済みか。

まあ、いい。

この国にあと4日はいる。いい女がいるだろう。

「じゃ、パトリックと長三山によろしく伝えてください」

30分ほど話をして、私は会社を後にした。

ガタガタと揺れるエレベーターに乗り、一階に着いて降りようとした時、強引に入ってきた女性とぶつかる。

「?!（君!）」

出る人を優先にしなくてどうする。

私は女性を睨みつけた。

「?不起!（すみません）」

女性はそう謝り、私がエレベーターから出たのを確認して中に入る。すれ違いざまに薔薇の香りがした。誘われるように彼女の顔を見ると、私は不甲斐なく怒りを忘れ女性に見とれた。

真っ白な絹のような美しい肌、少し釣り眼の黒い瞳、薔薇の花弁のような唇、ふわりとまとめられた髪ははらりと少しほどけて、白いうなじに黒髪が絡まっていて、何とも言えない色気を醸し出していた。

しかし私が声をかけようとした矢先、無残にもエレベーターのドアは閉じられ、上がっていった。

すぐにチンと微かな音がして、5階で止まったのがわかった。

まさか?

確認しようかと思ったが、腕時計は10時半を指しており、私は次のアポの場所に向かうしかなかった。

その夜、私は同僚との夕食を早めに切り上げ、滞在ホテルに戻った。

今朝見た彼女のことを気になっていた。

しかし館林の会社に電話して確認するのは自尊心がゆるさず、ミヒロちゃんに電話した。

「ああ、届けてくれたんですね。ありがとございます。館林さんは元気でした？」

電話口から可愛らしい声が聞こえる。

この声はいいよな。

パトリックが少しうらやましく思える。

「ああ、元気だったよ。鈴木って女性がいて仲良さそうだったよ」

私はあの女性のことをどう切りだそうか迷いながら、そう答えた。「そうなんですな。ああ、うまくいってよかった。館林さんは強引だからちよつと気になってたんです。ところでアイリーン見ました？」

「アイリーン？」

私は胸がざわつくのがわかった。

「そうです。バーのシンガーのアルバイトしていて、すごく綺麗な人なんですよ。結局あまり話すこともなかったんですけど……。歌手になれたらいいなと思ってて」

綺麗？歌手？

あの女性はアイリーンなのか？

聞くよりも先に他のスタッフについてミヒロちゃんが話してくれたので、私はそれとなく遠回りにそのアイリーンという女性についていくつか質問した。

15分して電話を切った後、私はパトリックの苛立つ様子を想像して面白がることもせず、ミヒロちゃんから得た情報をまとめる。

現地の華僑で、年頃は20代後半、真っ黒なストレートの黒髪、釣り目の瞳、ミヒロちゃんより少し高めの身長……

彼女だ。

きつと……

私は確かめずにはいられず、パソコンを開くと、その名前を入れる。

Aileen Huang Singer

グーグルでそのキーワードで検索する。
そしてヒットした。

彼女だ！

私は食い入るようにパソコンの画面を見た。

シンガールの写真と共にバーが紹介されていた。写真の彼女は化粧の具合と衣装で印象が違って見えたが、彼女に間違いはなかった。
私はメモを掴むと、バーの場所を書く。

毎週月曜日、夜9時からか。

今日は運がいいことに月曜日だった。腕時計を見ると午後10時。
すでに終わってるかもしれない。
しかし私は運を頼って、その店に行くことに決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2036z/>

私の歌姫

2011年12月7日13時47分発行